



門 遠
號 1449
卷 1

競奇遺聞序

夫史之記事也使其傳于後世或自百世之下知百世之上是使當時之事炳乎紙上者除書又何從邪梅翁先醒集古之異事而抄其要分十有八篇其文從約總成五卷名曰競奇遺聞因需予序予閱之是幾剪燈新話之流乎亦

競奇遺聞序



足以廣人之知見者也且書肆顧舊堂
主人謂予曰我邑刻文字者自古所未
曾有也幸遭文運之化而
賢尹施仁政于下恩澤無所不及矣因
請刻書之事 官可之乃先刻此書
是我邑刻書之鼻祖也予亦喜我邑刻
書自此徃々而有之矣不辭其需因冠

數字其首其取笑於大方君子者亦其
所矣

文化身二乙丑夏五月

伏瞻 山中辰仲龍撰



競奇遺聞 第一卷 目錄

都藍尼
 阿古野松
 深砂大王
 繪馬神
 金烏玉兔集
 殘夢長壽
 淨藏貴所

第二卷

禁把戒邪淫僧尼

第三卷

回船漂流

第四卷

天物

巨勢金岡

生馬仙人

唐船漂着

第五卷

陽勝仙人

道場法師

小野の篁たけのこ

申まを樂がく

赤山明神

競奇遺聞 卷の一

都 藍尼

都藍尼は和州の人なり 仁法を精修し 遂て仙術を
 學ぶ 吉野山の林庵に居し 世に傳ふ 令峯山公黄金の
 地令別後王菩薩を護り 婦人の宅を事と容さば
 都藍いよも女身なりといふも 淨戒盡威 豈凡女の族
 比せんやとて 人々慕ふ 忽電晦暝して 迷て路を
 亡し 持而の杖を弃 其杖おのづゝ 殖く大樹とる 都藍
 又龍を咒し 少くも 山小昇る 終の泉小到く

進む事を得どおぼえ鳴く山嶽を踏む皆ごとく
 あり共託を奉り池宮下ふりりけ二町の跡今当ぬ
 世ふし長生の道得を共終断をちんば託八十一
 鱗九九の救一三五を九とて老湯の能変とるあこ
 葉公龍を畫して託する費長房八竹の杖を昔波
 投れハ化して龍とあり

江右野松

一條院中お藤實方不教小座きりて奥州
 してせり事とせりり和歌の名を註して

なりぬ古井の松を尋ねにむ人好一人の翁りて実方
 小ふ古井の松に出羽とあり奥羽はむ一州ありて今二筋
 と好りり実方羽川小部とて古井の松をんかま翁八塩竈
 四井之と後実方馬小部とて出羽道の傍り一社ありり人
 といれ奥州名取郡長湊の道祖神之行人なり馬より
 下る実方同といれづこの神を言てあれハ王城加茂川の西
 一条の山出毛玄路道祖神の娘之密に商人小通りといて
 故小放逐せりてありり人祭と禱る者陰想
 造りて神前掛り小岳靈護あり今中野淨浴といふ

後實方云然則小品けざんの女神かみじんなり何ぞ馬うまより下くだんや
と一行やく小実方の馬うま傍わらわに敷あぬ実方まじもまゝに死しを因よては社やしろ
乃例たとに葬くわむるを靈れい化けして雀すずめを引ひいて死し来きり王城きやうじやう北西
觀かん學院がくいんより飛ひ鳴めいをとりて

深砂大王

世神よじんを流なが支し三藏さんざう天竺てんぢくより一切いっけつ經きやうを持もちて歸かへりて
跋はつ沙さをとりて華か一いつ成じやう發はつ一いつ心しんをとりてとりては并ならび
忽たち然ぜんとして現げん一いつ船ふね筏いかだをとりてとりては并ならび
泰山たいざん府君ふきんも祐すけ比ひ社やしろと日光にっこう神かみ橋はしの向むかひ小宮こみや居い有あ類るいは

大明院たいめいゐん一品いっぴん准后しゆんごう法親王ほふしんの淨業じやうごふ之の本地ほんぢ毘沙門びさもん天神てんじん橋はし
も護ごりて又また大坂おほさか新波しんは村むら天王てんわうの神宮かみみや寺てらを深砂ふかす寺てらと云い
又また毘沙門びさもんの境内けいん小深砂こふかす大王てんわうの祠やしろあり通とほり大小おほこほ群ぐん衆しゆを

繪馬神

道公だうこう法師ほふし天王てんわう寺てらに居いて法ほふ善ぜんを持もちて奉ほう事じ奉ほう行ぎやうあり
嘗なほて熊野くまの小宮こみや居いて夏なつ終はつる奉ほう事じ小深こふか寺すに書かふ一いつ村むらを
と居い宅たくる一いつ大樹おほきの下した小宿こしゆくと云いふに衆しゆ半はん針はり小騎こき馬ばの者もの
二十餘にじふご人にん樹き下したに居いる人ひと心こころを云いふ衆しゆを引ひいては并ならび
引ひいては并ならび馬うま足あし損そんしては并ならび何なに事こともなからず

徒を歩むる中終りに發るる時且道公怪んで
 樹下の巡りをせん小神祠なり其像朽弊又糸の
 斤板のよ小馬形を圖しるるなり前足の取も板
 破別家以道公と云ふ系をきつて怒誓補の神の言と
 誠人と欲しそ次の本尚樹下の宿に本坐小前請ありて
 又呼ぶ翁馬小系なりて出程を曉小向す翁馬あつて
 謝しそ云師の賜を承り馬御を後と幸ふははといそ
 耳聒をゆしそ道公小餉も道公向すそ先の教誨を令
 翁言く何をもて行疫神なり并管内を巡るはれ

前驅を多き出され必苦をきて罵る今師の恵を蒙り
 こそ毒考の海一我劣報体精にて淨妙此をゆき道公
 受る事一我劣報体精にて淨妙此をゆき道公
 善を誦し我劣報体精にて淨妙此をゆき道公
 此れを憐れんそ三日誦經の弟四日小神頭面を出し
 此禮しそ云師の慈かかるとく補陀洛迦山小生し
 觀世音孔眷属とる事とゆき事なり預ハ師は本草を
 して船なり我本像を削て海上小流め道公
 教のごとくし海小字む微風も起す小念南を

さして馳スセ乃ノ車クルマ一ヒト免ツケがゆく一ヒト其ス本ホ村里ムラの老オシがシ後ノチ
るる樹キ并ナびシらシの死シ相トとシらシてシ金色キンシキの光ヒカリの照テ耀ヤウと
一ヒト々々南方ミナミ小コ免ツケ去サふと道ミチ公キミ寺テ小コ海ウミつてツ語コト不フ國クニ老オシ大オホ
嗟サ嘆タンと

金烏玉兎集

陰陽インヤウ家ケ小コ一ヒト著シヤクあり名ナづけケて人ヒト玉タマ烏ウ玉タマ兎ウサギ集ツグいハ又マタ
簞タマ簞タマ神カミ裡リ傳デンともシつツあアれレ安ヤス倍ハヒ博ハク士シ晴ハル明メイ朝アサ臣シ勅ツクと
奉ホウずツてテ陰イン陽ヤウをヲ占ウラひヒ中ナカの災サイをヲ消ヤスとシ心ココロ口クチ位イ縫ヌイ殿テン
小コをヲ心ココロにニ陰イン陽ヤウ博ハク士シ主ヌシ計ケ檢ケン以ヨリ少シむム初ハジメ免ツケ晴ハル明メイ法ホウ西セイ小コ

赴ツクたタ薩サツ州シュウ小コ後ゴ船セン一ヒト支シ那ナ小コ往ユキくク雍ウ州シュウ小コ平ヘイ荆キョウ山サン
小コ伯ハク道ダウとト妻メありリ自ミ云ク文ブン珠シュ大ダイ士シの天テン理リをヲ得エりリ
晴ハルの就ツクくクあアれレをヲ学マナぶブ一ヒト書カキの書カキ紙シ與ヨりリ文ブン珠シュ裏リ書カキ
陰イン陽ヤウ内ナイ傳デン集ツグとト晴ハルの受ウケてテ本ホン邦クニ小コ海ウミりリ秘ヒしシ
石イシ画ガの中ナカの簞タマ簞タマ小コ藏ザウてテ用ヨウぎギ筆ヒツ日ヒト久ク一ヒト晴ハル明メイが
子コ道ダウ滿マンあアれレをヲんンとト欲ホウとシれレもモ得エどド道ダウ滿マン私シ小コ
晴ハルの妻メ妾セウ梨リ花カ小コ通ツウじジ晴ハルのあアれレをヲとシどド梨リ花カ
ひヒそソふフ道ダウ滿マンあアれレをヲ心ココロにニ即ツキかカの書カキをヲ写シヤクしシてテ封フウ秘ヒとシるル
一ヒト日ヒト道ダウ滿マン晴ハルのふフりリあアれレ後ノチ小コ文ブン珠シュ一ヒト

一書二行通開卷二



松坐寫



遇く秘書を納め其名を金鳥玉免集とて天地
際陽の教を手に裡にんるごとく清明云予也
伯道師小徒わくけ書をばり秘して簠簋
あり故小予号改く簠簋袖裡傳とて世豈是
を志する人何んや汝が夢ハ妄想特倒之金玉を
ばると愛する者言く中少並や道満甚争つて
遂小頸を削られん半を賂せしむるが道満手を
出して暗の頸を截らる時小荆山の矢火小令小伯道
らねを怪んく穀成山小大山王秘法を行きて暗の

死する半をかり則家邦小渡く人少るく暗の墓
小ゆること哀慕して遂小墳を築く骸骨を集め皮
肉を禱ひ骨節を續ぐ生活續命の法を修け暗
明獲生に伯道おんく快条一少小於て伯道
道満が宅おれり回て云暗の也や吾道満答く
いみし其一人何り今ハ墳墓とるねを伯道云われ
其人竹林の中小ゆる事少知れぬ汝の事ある道満
争つて清明とる生をば我頸を削ん事を賂ふせむ
伯道云汝争つて吾清明死して已小久一世の人

卷二 賢明 二

糸多ふく相物しと晴夜出まゝ道満大小遊るく
遊ふ自頸劍く死次

残夢長夢

奥州小砂後とつ著何り自字して呼白と号せ
秋風そ人と柱伝るるに俗邪を風顛狂れ
男二一休を友と禪要を好るを又時く人と結る
耳一元曆文治の事を語りて或は主厨美經ハ
何るを語り毎昔とを事をも誰ハけりとも次
平氏と某が戦つて話殆親見の者のごとく

人怪んであれを誥くとも口れあもを忘りたりとよ
傍の天海及び松香とつ若砂及小偶了張及常
小好んく枸杞飯を食ひ天海もまうとまを要次
人と結つて云張及長生の事を速さびくを枸杞
を服する也人怪んてかまハ蓋常陸房ゆんや
天海を又枸杞を食し一意小伝を付小伝あく
とまの事一うも速する事うれ緩を懐く
あれ善命と延る事いそとど亦若狭國小比丘
尼と号する者ありと父一旦山小入く異人小偶了

修しゆ一いつ處ところ小こ到いたるる小こ殆たいてい一いつ方はう地ち中ちゆうてて別べつ世せ界かいここまま人ひと
 一いち物ぶつとと与よつつてて云い見み人ひと臭くさへへこれこれをを食たままららとと死し八はち年ねんをを
 延の考こうせせばばととつつてて父ちち推おしりりてて影かげ山さん海かいのの其その女にょ子し運うん送そう人にんて
 衣い帯おびををととららんん人ひと魚いさなをを袖そでのの裏うららら出でてて則すなは食たままささ
 一いつむむそそ女にょ子し四し百ひゃく余あまり年ねん一いつももらら白しろ江え兵へい危ゑい中ちゆうにによよままるる
 越こ前ぜん由ゆ小こ大だい男なんととつつててつつててののりり右みぎ時とき海うみ山さん小こ入いるる
 本もとをを使つかふふ遇ぐ甚じん一いつ大だい樹じゆのの孔あなららととええくくああれれふふ
 海うみのの底そこ小こ水みづありりすすままらららら既すでとと使つかれれてて飲のむむ
 其その時とき法はふ法はふ中ちゆうににててややとと人ひと男なんのの水みづありりてて飲のむむ

教しゆ百ひゃくのの妻よめをを好このむむ

淨藏貴所

淨じやう藏ざう貴き所しよハハ之これ昔むかし教しゆ匠じやう法はふ師し弟てい八はちのの子こ之これ洛らく陽やう
 のの人ひと之これ寛かん平へい之これ手て小こ生なまるる母はは之これ嶮あや嶮あや帝ていのの孫まご女にょ之これ淨じやう藏ざう
 生なまれれてて四し果くわいありりてて千せん字じ又またとと誦じゆんとと一いつとと耳みみをを十じゆとと知しるる
 腦のう筋きん倫りんありり七しち果くわいののままののんんとと免めん之これ危ゑいのの事こと成なるる
 小こ聖せいとと淨じやう藏ざう神しん人にんををししてて下した板いたををおおてて父ちち小こ聖せいとと
 父ちち大だい小こ聖せいありりとと淨じやう藏ざう指さし宿しゆく山さん小こ住ぢゆう小こ神しん童どうをを多たくく
 出でくく海うみ水みづ持もちちぐぐ又また慈じ悲ひ之これ川がはをを海うみにに仙せん人にんとと

船を乗せある獻山小堂にて玄昭のすゝもる僧の長衣
 小舎り波斯國より漂來に胸痛と患ふ津花
 水を啜りて已し心甚痛喚いそ曰西國小かくの
 かし異人何んば津花後小毒と要く二子と志
 名と布能伊能と小今う小むく布能伊能の二氏
 修くおわり天曆年中八坂塔傾斜に其方凶
 阿りこを修く半王城小向小官人靈説て憂ん
 津花おれを初ふ微風吹来く室澤小あま阿り
 あふ能く境忽ち小端垂す人々小并異之と

津花二子を膝の上小座せし免鴨川小むつて持を
 須史あそ河小逆流と又隣家へ松の実あ記
 阿り二子おれとそんと勢と津花呪まれを枕自
 死する津花八坂寺小寓する府東盗多く入る津花
 小れを吐き賊等成麻本と揺ゆめ且小呪縛を解け
 盗人礼をうとて去る父の行年次津花然然
 より軍して上洛と檣小一條堀川を隅ふ津花
 止めく蘇生さしむけ所を廢り橋とら小凡奇異
 志野一牧奉とてう次津花八持物の人こ

学内外を兼修（ガク） 密（ミ） 小涉（コ） 考（カウ） 星（セイ） 天文（テン） 易（イ） 筮（シ） 醫（イ）
 卜（ウ） 結（ケツ） 管（カン） 音（オン） 律（リツ） 文章（ブツ） 伎（キ） 氣（キ） 之（ノ） 貫（カン） 橋（キョウ） 之（ノ） 技（キ） 華（カ） 以（イ）
 康保元（カウ） 年（ネン） 仲冬（チュウ） 廿一日（ニ） 赤山（セク） 寺（ジ） 居（キ） 小（コ） 越（エツ） 氏（シ） 其（キ）
 七十四

競奇考選 卷の一終

